

## 「問い」を立てることの難しさについて ～「探究Ⅱ」の教室から～

研究推進部・吉田 究

2年生1組「探究Ⅱ」には、今年度も8人の教員が入り、手厚く(?)指導を行います。

昨年度に続いての課題研究なのですが、新型コロナウイルスによる休校の影響を受け、今後のスケジュールは相当タイトに…。秋以降、校外でのイベントに参加すること、年度末の論文提出を考えると、今月中くらいには研究テーマをせねばなりません。(もちろん、それ以降も(微妙に)変化することはあるでしょうが、それにしても)何よりも大切なテーマ設定の過程をこうして急がねばならないということは非常に厳しいことのように思われるのです。

先週・今週と、授業ではその作業を行い、昨年度のテーマを継続し、さらに深化させようと順調に動き始めている生徒もいれば、テーマ変更や、あるいはどう深めて良いのか分からず、足踏みをしている生徒もいます。

そんな作業を眺めながら感じるのは、彼らが、目の前の「成果」、「結果」に囚われすぎているのではないか、ということです。これもまた、(前号に書いたのと同じ)我々大人たちのせいではないかと(私などは)責任を感じてしまいます。

やれ「エビデンス」だ、やれ「PDCA」だと言い、私たちは教育においても成果、結果、数値目標、効率化を求めようとします。いや、でも、そのことが本当に教育的であると言えるのか、我々(特に教師)は立ち止まって考えてみる必要があるように思うのですが、いかがでしょうか？

1学年の国語総合A(現代文分野)で、永田和宏氏(細胞生物学者/歌人)の「知の体力」という随想を扱ったのですが、例えばそこにはこのような記述がありました。

本来の勉強というのは、あるいは学問というものは、何かのためにするものではないのだろう。具体的に何かを解決するためにという目的のはっきりしたものは学習であり、学問は、学んで問うもの。何かの解決のためのものではないと思いたい。(中略)具体的な目標を設定しない、もっとはるかに遠い未来に漠然と何かの役に立つ勉強もあり、それが学問というものである。(傍点、吉田)

何か具体的な結果を求めようとする発想は、「いい成績を取るために勉強しよう」「偏差値の高い大学に入るために勉強をしよう」といった「動機付け」、あるいは「勉強しないといい大学には入れないよ」といった「脅し文句」に繋がると永田氏は言うのですが、いやいや、果たしてそれは「動機付け」としてさえ「最強」のものであると言えるのでしょうか…？

人生100年時代と言われ、生涯学習と言われもする昨今、生涯に渡って学び続けるモチベーションは、そんなところから出てくるのでしょうか？ なんか、もう一段、抽象化した、普遍的な、そんなレベルで思考してみたいように私などは思うのです。

とは言え、具体的提案が無意味だと言いたいわけではありません。でもそれは、例えば森鷗外『舞姫』(1890年(明治23年))の中で太田豊太郎が「ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべし」と言うように、個別の事案をしらみつぶしに潰していても仕方がないのです。私たちはその「精神」に触れた学びをしなくては。そして、それこそが「学問」であるように思いながら私は探究の教室におります。

ちなみに、永田氏の「知の体力」。引用部分のあとはこう続きます。

私たちのこれからの時間、将来の人生に起こることは、すべて想定外のことなのである。想定外の事態を、なんとか自分だけの力で乗り越えていかなければならない、生きるとはそういうことである。

そう。生きるとはそういうことである。

### 6月16日(火) 2学年 「丹BAL台湾」

「台湾とは国なのか」「私たちは今後、台湾とどのように付き合っていくべきか」という題に対して、各自が考えてきたことをグループで話し合いました。まずは「台湾とは国か?」という問いに「YES」「NO」の立場を決めて、野嶋剛『台湾とは何か』第2章から根拠となることを引用しながら、意見を述べ、班としての意見をまとめています。国家成立の条件と考えられている「領土」「国民」「政府」「国際承認」のうち、「最初の三つまでは満たしているから国だ」という人、「国連に加盟していないということは、承認されていないから国ではない」という人に分かれていたようです。これを踏まえて、「今後、どのように付き合っていくべきか」、最近の新聞、ネット上の記事を参考に考えました。WHOには非加盟ながら、いち早くコロナ対策を打ち立て、マスクを増産して諸外国に贈ったこと、災害時には日本と台湾の間で救護隊が行き来したり、義援金を送りあったりと助け合いをしていることなどを読んで、話し合いました。来週、クラスの中で各班の考えを発表します。

### 6月17日(水) 1学年 「丹BAL1」

5時間目は知の探究コース、6時間目は普通クラスが、「小中学校で地域について何を学んだか」について、異なる中学校出身者で構成された班で話し合いました。

8班に分かれてそれぞれに担当の先生が付き、話しあいました。丹波竜、丹波三宝(黒大豆、大納言小豆、丹波栗)などの観光資源や特産品、鐘が坂の鬼伝説、大河ドラマの舞台として話題の黒井城、織田信包が治めた柏原藩、愛宕祭り・厄神さん・デカンショ祭、田ステ女、稲畑人形・丹波布・立杭焼のような伝統工芸、カスミサンショウウオ、ホトケドジョウやオオムラサキなどの生物…と地域によって学んだことはそれぞれだったようです。地域のもつ魅力について、再発見するよい機会になったと感じました。また、多くの中学校では将来の職業について考える機会をもってきたようです。

次回は「柏原高校ではどんなことを学んでいきたいか」について、具体的に考えていきます。

### 6月15日(月) 3学年「総合Ⅲ」

「新型コロナ禍」をテーマに、それぞれが3分間、自分の想いを語りました。

「医療従事者に対する、差別的な発言や行為が信じられない」という内容が多かったように思われます。他人のために、自分を犠牲にして働いている人たちに対して、その子どもが保育園に来るのを拒んだり、共に行動するのを嫌がったりするなどというニュースや記事が見られました。高校総体がなくなり「自分たちだけがなぜこんな目に」と落ち込んでいたとき、感染して亡くなった人や、感染したことによって差別された人、他人の命を救うために懸命に働く人のことを知って、自分たちのおかれている状況はまだましなのだと思直した人がいます。「潜在看護師」について述べた人は、「そんな言葉があることも今回初めて知った」と言いつつ、「育児や介護を理由に、職を離れていた人がこの危機に戻ってきたという話に感動した。自分が感染するかもしれないという恐れがあるのに…」と語っていました。海外に親族の方がおられて、日本とその国の政策の違いを説明し、安否を気遣って定期的に連絡している様子を語った人もいました。私が見る限り、自分事として捉えてしっかり話している人が多かったように思いました。さすが、3年生!

